

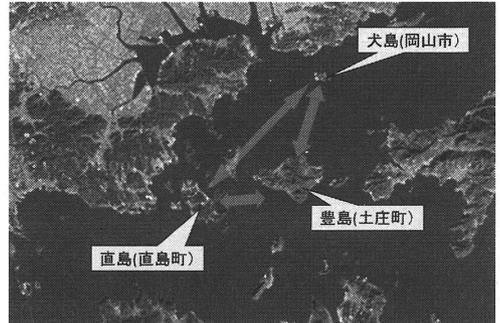
ベネッセアートサイト直島の活動の軌跡とその意義 現代アート活動による地域活性化の一例

笠原良二（株式会社ベネッセホールディングス直島事業室／財団法人直島福武美術館財団）

はじめに～ベネッセアートサイト直島について～

岡山県宇野港から南方にフェリーで約20分、香川県高松港からは北方にフェリーで約1時間の位置にある瀬戸内海の周囲約16kmの小さな島＝直島（なおしま）【香川県直島町】が、「現代アート活動が地域を元気にしている島」として、国内外から注目を集めています。

直島では、(株)ベネッセホールディングス（以下、ベネッセ）と財団法人直島福武美術館財団（以下、美術館財団）によって、「ベネッセアートサイト直島（以下BASNと表記）」と総称される様々な現代アート活動が行われており、その中核施設として「ベネッセハウスミュージアム」「家プロジェクト」「地中美術館」「李禹煥美術館」「直島銭湯「I♥湯」』といったアート施設が公開、運営されています。



直島から始まったそれらの活動は既に20年以上の歴史を積み重ねており、活動エリアも直島だけにとどまらず、犬島（いぬじま）【岡山県岡山市】や豊島（てしま）【香川県土庄町】といった周辺の島々にまで広がっています。犬島においては2008年より犬島アートプロジェクト「精錬所」等が、豊島においては2010年より豊島美術館等のアート施設が運営・公開されており、現在では多くの人々が直島を拠点にしながら、豊島や犬島にまで足を延ばすことで、これまで以上に瀬戸内海の魅力を満喫しています。

これらのBASNの活動の全てに貫かれている思いは「Benesse（ベネッセ）」の実現です。「Benesse」とはラテン語の「bene（＝良く）」と「esse（＝生きる）」を組み合わせた造語で、ベネッセグループが最上位の理念としている「よく生きる」という意味の言葉です。

民間企業グループであるベネッセは、事業活動として様々な商品・サービスを通して人々「Benesse＝よく生きる」を支援しています。ある意味ではそれこそが民間企業の本来の姿とも言えるでしょう。

しかし一方で、商品やサービスを離れたところで、「Benesse＝よく生きる」が実現している場を創り出すことも重要だと考えています。それは、「Benesse」を冠する企業としてのひとつの使命であるし、自らの存在意義を問い続けることでもあります。その行為は最終的には企

業の成長にもつながるとも確証しています。

ひとりひとりの「良く生きる」を実現させる為には、それらの人々が良い地域、魅力ある地域に暮らしていることが重要であり、ひとりひとりの Benesse の実現のためには、実は、良い地域、魅力ある地域を創らねばならないと考えています。

その最良の方法として、私たちが選んだのが現代アート活動なのです。

これらの考えを基に現在の BASN の活動を簡潔に紹介すると以下ようになります。

「BASN とはベネッセと美術館財団が一体となって行っている、「直島」から始まり「犬島」「豊島」へと広がる、それぞれ固有の歴史や文化や暮らしを持つ東備讃瀬戸の島々を舞台とした現代アート活動と、それらの活動による地域再生、地域活性化活動全体の総称」

BASN にとってアート活動はそれ自体とても重要なものではありませんが、そののみが目的ではなく、現代アートの持つもっと大きな力を信じて更なる大きな目的のための手段としてとらえているともいえます。

現在の直島の状況

現在の BASN の島々の現在の状況を知る為とその中心である直島の様子を記しておきたいと思えます。

ここ数年実に多くの人々が直島を訪れています。NPO 法人直島町観光協会発表による 2009 年の直島町への観光入込者数は約 36 万人。

尚、2010 年の同データは約 63 万人。

ただしこのデータは瀬戸内国際芸術祭効果という特殊要因が大きく、以下基本的には、経年変化を確認する為にも観光関連のデータについては、2009 年データを最新の通常年データとして紹介していきます。

入込者数は島の人口の 100 倍以上もの人々が直島を訪れています。また、この

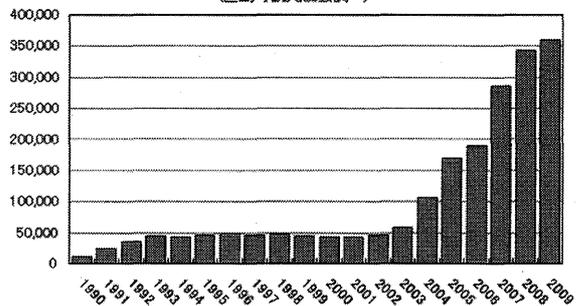
10 年間で 8.3 倍、直近 5 年間でも 3.3 倍の伸びを示しています。

更に、同データによると、来島者の実に 9 割程度の方が「文化」や「歴史」や「アート」を目的として直島を訪れていることもわかります。実はこの来島者の目的意識の高さが直島の特色のひとつだといえます。

また、若い人たちが多く訪れていることも大きな特色です。私たちが実施したアンケート結果では、20 才代が約 44%、30 才代が約 23% を占めています。

また、来島者に占める女性の割合が大きいということも重要な特色です。同アンケートでは実

直島町観光客等入込数
(直島町観光協会調べ)



に67%が女性でした。つまり「目的意識を持った若い女性が多い」それが直島の来島者の特色であり、実はそのことこそが現代アート活動が島にもたらした大きな効果のひとつだといえます。

現代アート活動が、過疎高齢化の島（2008年度直島町の高齢化率30.8%、日本平均22.7%）にとって一番少ない“若者の姿”を、交流人口として島に呼び込む原動力となっているのです。

さらには、ベネッセハウスの2009年度宿泊者データを参考にすると、全宿泊者の約18%が海外からの来島者であり、海外からの注目度が高いことがわかります。また、その内訳はアジア40.8%、ヨーロッパ31.3%、北米23.4%。国別に見ると、1位アメリカ、2位韓国、3位フランスの順番となっています。年によってアメリカと韓国の順番は入れ替わりますが、上位3カ国はここ数年変わっていません。

ただし、2011年3月11日以降、海外からの来島者は激減しており、これまでの約20%前後が海外からの訪問者という状況は当分の間は見込めないかもしれません。しかしそれでも海外からのお客様が多く、その中でも欧米のウエートが大きいことが直島の特色であり、瀬戸内海の小さな島が現代アートを通じて世界とつながっているというのも、地域にとって重要な要素となっています。

活動の経緯

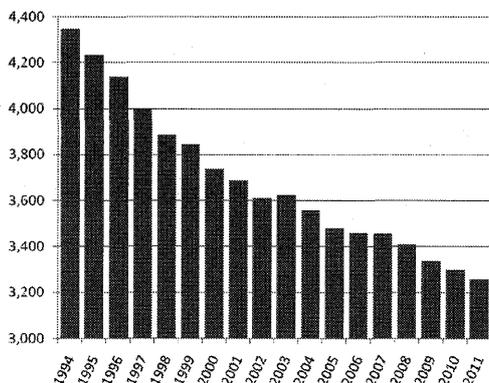
BASNの活動の経緯を説明する為に、ここで改めて直島の基本データを紹介します。

行政区域は香川県。直島本島と周辺の2つの有人島を含む27の島々とで直島町を構成しており、平成の大合併を経た現在でも単独町制を貫いています。

香川県高松港の北方13kmなのに対し、岡山県宇野港からは南方3kmに位置し、岡山県玉野市より海底導水管で上水が送られるなど、香川県でありながら岡山県側との深いつながりを持っています。

2011年4月1日現在の人口は3,259人。人口は長期にわたって漸減してきていますが、近年では社会的動態での人口流出はほぼ止まり、自然動態による減少が中心となっています。

直島町人口推移



直島の北部には三菱マテリアル(株)直島製錬所があり、100年近くにわたって操業。銅を中心に、金や銀、プラチナ等を製錬し、直島の産業の基幹を担っています。

その為、直島は「製錬所の島」として知られてきたという側面も持っています。近年では隣島「豊島」に不法投棄された産業廃棄物の中間処理施設建設を受け入れたことを契機に、環境リサイクル産業の拠点という新たな一面も見せています。

また、はまちや海苔の養殖事業も盛んであり、漁業も島の重要な産業のひとつとなっています。

BASNの活動を説明するためには、まずはその受け入れ側となる直島側の思いから説明せねばなりません。実はBASNの活動も、1959年～1995年の9期36年間に渡って町長を務めた故三宅親連氏の町づくりに対する基本方針がその原点となっているといえます。

三宅氏は、初めて編成した1960年度当初予算大綱説明の中で、以下のように説明しています。
(「直島町史」より一部抜粋)

「直島の北部は既存の直島製錬所を核として関連諸産業のより一層の振興をはかり、町経済の基盤とする。

中央部は教育と文化の香り高い住民生活の場。

南部は瀬戸内海国立公園エリアを中心に自然景観と歴史的な文化遺産を保存しながら観光事業に活用することで町の産業の柱にしたい。」

この半世紀も前に発信された方針が、現在も直島の町づくりのグランドデザインとして生きており、更に言えば、三宅氏の直島南部開発の夢や方針が、様々な曲折を経て、1985年11月の株式会社福武書店(現、ベネッセ)の創業社長故福武哲彦の直島訪問を実現させ、その後のベネッセの誘致へとつながるのです。

<直島南部開発のスタート(1980年代後半)>

ベネッセによる直島開発は、「瀬戸内海の島に世界中の子供たちが集えるようなキャンプ場を作りたい」という創業社長福武哲彦の夢と、「国立公園の美しい景観と自然を残した島の南側一帯を、文化的、健康的で清潔な観光地として開発したい」という直島町長(当時)三宅親連氏の信念が結合することでスタートしました。

1987年に、現在のベネッセアートサイト直島の敷地となる4つの無人島の土地を含む、直島南部一帯の約165haの土地を一括購入。最初の施設展開として、1989年の「直島国際キャンプ場」がオープン。ベネッセの事業である通信教育講座の会員を中心としたサマーキャンプを開催。以後十数年にわたって継続し、延べ1万人以上の小学生が夏の数日間を直島で過ごしたことになります。

この時期には、直島開発を現代アート活動を軸として展開させるという明確な方向性はまだ打ち出されてはいません。ただ、自然の中に身を置きゆったりとした時間の中で思索する「まどろみの文化」を提唱したり、直島国際キャンプ場に現代アート作品「かえると猫」(カレル・アペル、1990)を設置するなど、その後の活動の片鱗を伺うことはできますが、方向性を模索する時代だったといえます。

<瀬戸内海の風景と現代アート（1990年代前半）>

1992年、安藤忠雄氏設計の現代美術館とホテルが融合した「ベネッセハウス」がオープン。直島における現代アート活動の最初の拠点施設となりました。

オープン後の92年から翌93年にかけては、世の中の多くの美術館同様、積極的に企画特別展を実施しています。内容も純粋な現代アートを軸としながらも、オープニング企画として開催された「三宅一生展 ツイスト」や93年9月の勅使河原宏「風とともに」展といった広く文化全般にまで視野を広げた展覧会があるなど、内容は多岐にわたるとともに、約1年半の間に5回もの展覧会を開催しています。

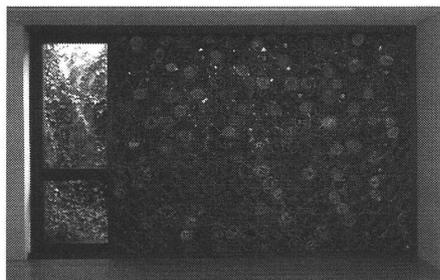


ベネッセハウス ミュージアム
写真：池田ただし

これらの企画展覧会の時期を経たのち、ベネッセハウスでの活動は、常設展重視、一点一点の作品制作重視、コレクション重視へと変化していきます。

それは、建築物としての「ベネッセハウス」のコンセプト自体がそうであるように、アート活動の方向が“世界に誇るべき美しい景観である瀬戸内海の風景（場）と現代アートを如何に融合させるか”といった視点へと明確化させていくことで、直島場でしか成立しない展示方法を採用ようになっていったことは必然だったと言えるかもしれません。現在も直島のシンボリックな作品として親しまれている草間彌生作「南瓜」が設置されたのもこの段階の1994年秋のことです。

その後は、ベネッセハウスの館内をはじめ敷地内の屋外において、その場でしか成立し得ない現代アート作品が生みだされて行くことになり、現代アート作品を通して瀬戸内海の美しさを再発見することにもつながっていきました。また、それらの実現の為にコミッションワーク方式が取り入れられ、現地制作作品が増えていったのもこの時期からであり、1996年4月ヤニス・クネリスによる「無題」がベネッセハウスにとって最初の本格的な現地制作作品として生み出されます。



ヤニス・クネリス「無題」
写真：安斎重男

また、ベネッセハウスは（その後開館する美術館はすべてそうしていますが）オープン当初より直島町民とその同伴者は入館料を無料にし、さらに各展覧会関連のイベントに島民をご招待するなど、できる限り島民にとって開かれた美術館であろうとし続けています。

< 地域の歴史・暮らしと現代アート (1990年代後半～) >

1990年代後半に入り、「場」とアート作品の一体化をより一層深める為、それまで国立公園である直島南部の自社所有地内でのみ展開していたアート活動を、その敷地から飛び出させ、直島の歴史や人々の暮らしとの組み合わせの重要性の認識のもと、人々の住む集落を舞台に展開されていくことになります。島の南部の閉じた私有地のみでの来島者と直島との接点が、人々の暮らす集落での来島者との接点となるとともに、現代アートが島民と来島者の有機的なつながりが生み出されていくこととなったという点では重要なターニングポイントです。

その具体的な活動のスタートとなったのが1998年完成の家プロジェクト第一弾「角屋」です。直島の本村地区に残る築200年以上の民家を舞台に、外観は極力元あった姿に再生させる一方で、内部を現代アートの空間として再生させました。また、その作品制作には100名以上の島民が参加し、アーティストと地域住民が一体となって作り上げています。この「角屋」の完成が、ある意味では、現在のベネッセアートサイト直島の活動のあり方や直島の現在の姿を方向付けたといっても過言ではないかもしれません。



家プロジェクト「角屋」
写真：上野則宏

その後、家プロジェクトは「南寺」「きんざ」と展開。第四弾「護王神社」では地域の神社を現代アートで再生させるまでに至っています。“「あるものを壊して新しいものを創る」から「あるものを活かし新しいものを創る」へ”という、その後の直島におけるアートプロジェクト全体に影響を与える重要なコンセプトを生み出したのもこの時期であり、その意味からも重要なプロジェクトだったといえます。

また、2001年には「スタンダード展」と題された、直島全島を舞台とした現代アートの展覧会を開催。本村地区だけでなく正に直島全体へ現代アートを広げました。この展覧会では、全国から参加してくれた多くの若者と、島の中老年の方々がボランティアスタッフとして日常運営を担当。このころから、若い来島者と島の高齢者との交流が深まっていくこととなります。

これらの集落内でのアート活動を通じて、島に住む人たちが地域の持つ歴史や様々な資源を自らで再評価できたことがその後の島の活性化へとつながったという点も看過できないポイントだと思います。

< アートの核創りと新たな地域への拡がり (2000年代前半～) >

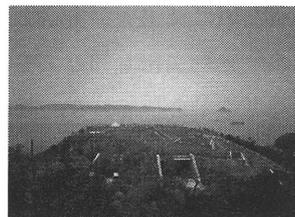
地域との関係の中で、直島の現代アート活動が広がりを見せる一方で、世界に通用するアートの場としての核を創る挑戦が始まります。それが2004年の美術館財団および「地中美術館」の

設立です。この美術館のオープンを機に来島者が一気に増加。それとともに、直島内の様々な動きが一層活性化していく起爆剤となりました。ただ、地中美術館は単なる集客力というだけでなく、クオリティの意味からもアートの場としての直島をより高いステージへと押し上げたという点でも重要な意味を持っています。

地中美術館というアートの核を生み出した後に、改めて地域と現代アートとの共生を目指していくこととなります。それが2006年秋に開催した「直島スタンダード2」です。この展覧会で整備された「はいしゃ」「石橋」「暮会所」がのちに家プロジェクトとして公開されています。

また、この展覧会では「直島の稲田の再生」に取り組むなど、単なる現代アート活動の範疇を超え、「地域とアートの共生」「アートによる地域の活性化」を強く意識したものとなりました。

その方向性の最たるものとして、美術館財団によって2009年7月『直島銭湯「I♥湯」』が生み出されています。地域の人々と来島者の交流の場として、また地域のお年寄りの憩いの場として、現代アーティスト大竹伸朗が手掛けた実際に入浴できる美術施設であり、オープン以後多くの人がこの銭湯を利用しています。この施設の重要なポイントは、運営が美術館財団から直島町観光協会に委託されており、実際の運営は観光協会とは地元自治会によって行われているということです。アートの場において、地域の人々が中心となって島外からやってくる人々を受け入れ、交流し、笑顔を生み出しているのです。



地中美術館
写真：藤塚光政



大竹伸朗 直島銭湯「I♥湯」(2009)
写真：渡邊修

直島内での様々な活動

90年代後半の家プロジェクトのスタートと呼応した形で、島内でも様々な動きが生まれていきます。

直島町は、家プロジェクトが展開される本村地区を景観保護重点地区に指定し、景観審議会を設置。古い町並みを大切にしていくことを公的に支える体制を創りました。併せて、景観保全ソフト事業として屋号プロジェクトを実施。本村地区の各民家に残る屋号を表札にして取り付けるとともに、屋号マップを作成。来島者の町歩きのツールとしています。

また、2001年に実施した「スタンダード展」の企画のひとつであった染織家・加納容子氏による本村地区の民家の為ののれん制作、設置が、町の補助による「のれんプロジェクト」として継続しており、現在では本村地区だけでなく港のある宮浦地区にまで拡がり、直島内の50

軒以上の民家の玄関にのれんがかけられ、町並みに華を添えています。

また、2003年4月直島町観光協会が設立され、来島者の受け入れ業務を開始。さらには、2004年2月に観光ボランティアガイド組織が設立され、中高齢者のボランティアスタッフによる来島者へのガイドが実施されるようになりました。ボランティアガイド組織設立の母体となったのは郷土史研究会、「アートを見るために直島を訪れた人たちに、アートだけでなく直島の歴史や文化も知ってもらい」という思いからの活動開始でした。年間平均約2,000人の方々のガイドをしており、既に延べ1万人以上の方を案内したことになります。

地中美術館がオープンする3ヶ月前の2004年3月には、埼玉県から移住してきた大塚ルリ子氏(当時29歳)が、本村地区に「カフェまるや」をオープンさせます。それまでの長い間、本村地区には飲食店がなく、増加する来島者のニーズに対応できていませんでしたが、「カフェまるや」が新しい賑わい創りの先駆けとなり、その後、直島町民や島外からの移住者によるカフェや飲食店が次々にオープンしていきました。現在、直島町観光協会が配布している「なおしまエリアマップ」には直島全体で50軒近くの飲食店が紹介されるまでになっています。また、若者向けの民宿や簡易宿泊施設等の宿泊事業者も増えてきており、同じく「なおしまエリアマップ」には30軒程度の民宿や旅館が紹介されています。

特筆すべきは、飲食店や宿泊施設のそのうち約75%は、地中美術館がオープンした2004年以降の開業であることです。産業というにはまだまだ小規模かもしれませんが、アートによる賑わいが着実に経済的な側面からも島の活性化にもつながっているといえます。またこれらの多くは、単なる飲食店や民宿としてだけではなく、来島者と島の人の交流の場としての機能や、若者を中心に新しい文化・アート活動の拠点としての機能も果たしつつあります。

直島から、犬島、豊島そして瀬戸内国際芸術祭へ

約20年にわたる直島での活動は、単なる現代アート活動の範囲を超え、確実に「直島」という過疎高齢化の地域に、新たな誇りと活性化をもたらしてきました。それは、直島という場が現代アートと組み合わせられることで、どこにでもある無名の地域から、魅力ある固有の場所へと生まれ変わるプロセスだったと思います。単にアート作品がそこにあるというだけでなく、その場所の持つ自然や歴史やそこに暮らす人々とながら、そこでしか成立しないものとしてアート作品生み出されており、そのプロセスや成果が現代アート活動を越えた様々な効果を直島にもたらしたのだと考えています。

そして、私たちの直島での活動が、そこからもたらされた幾ばくかの成果を常に伴いながら、一定の普遍性を持つとするならば、それは、直島を越えた場所においても同様の成果を導くことになるのではないかと仮説を持つようになりました。だとするならば、直島よりもさらに大きな課題を抱えている近隣の島々において、BASNとしてできることがあるのではないかと考えたのが、犬島と豊島の活動です。

犬島は最盛期 5,000 人以上住んでいたといわれていますが現在の島民は約 50 人で超高齢化が進んでいます。100 年前の製錬所遺構の残る島として知られ、現代アートとエネルギー循環型社会をテーマに取り組んでいます。

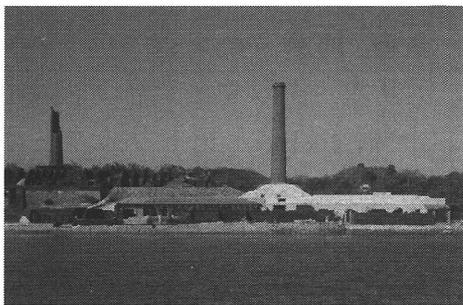
豊島は産業廃棄物の不法投棄事件で苦しんできた歴史を持つと共に、かつては米とミルクの島と呼ばれるほど農業の盛んな島でした。ここでは食とアートをテーマに取り組んでいます。

さらには 2010 年 7 月 19 日から 10 月 31 日までの 105 日間にわたって瀬戸内国際芸術祭が開催され延べ約 94 万人 (当初目標 30 万人) の人々が島々を巡りました。直島を中心に、豊島、犬島という BASN の舞台に、男木島、女木島、大島、小豆島を加えた 7 つの島を舞台とした現代美術展でした。

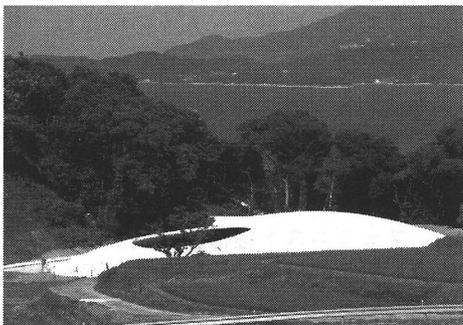
人々にとって、海を渡り、島を巡り、アートを鑑賞すると共に、島の持つ個性とそこに暮らす人々と触れ合うことに大きな価値があったようです。

香川県が中心となり実行委員会方式で運営されていますが、BASN もこの大きな現代アートイベントに協力し直島で培ってきた様々な成果を活かしながら、備讃瀬戸というもう一回り大きなステージで、アートが地域を元気にし、社会を豊かにしていくことを実践しています。次回瀬戸内国際芸術祭は 2013 年の開催も決まっています。

これからも BASN としては、直島、豊島、犬島の 3 島を日常的な活動の舞台の中心としながら、3 年に 1 回の瀬戸内国際芸術祭と連携をし、現代アート活動が良い地域を産み、そこに暮らす人々にとって Benesse が実現する、そんな状況を作り出し続けていきたいと思っています。



犬島アートプロジェクト「精錬所」
写真：阿野太一



豊島美術館
写真：畠山直哉

